農業土木を支えてきた人々

「勤皇家」中岡慎太郎と農業土木

村　田　正　亀*

I. はじめに

明治維新における立役者で土佐の生んだ偉大なる人物に，“海援隊長”坂本竜馬，そして“陸援隊長”中岡慎太郎がいる。今年(1988)は，その中岡慎太郎(1838年4月生)の生誕150年にあたり，それにちなんで各種のイベントが行われた。この機会に，中岡慎太郎が若き日の庄屋時代に行った耕地整理や農村整備の業績などを紹介する。

II. 中岡家と北川村（高知県安芸郡）

中岡家は，もと土佐郡領家村（現高知市朝倉字領家）の大庄屋で，平助を三代襲名していたが，後が絶えたので，高知市廿代町の庄屋，寿石正道の三男が母と共に，長岡郡上倉郷（現南国市上倉）の庄屋として，中岡家を継いで，要七を名乗る。

要七は安永8年(1779)～文化13年(1816)まで，吾川郡西畑村(現春野町西畑)の庄屋を勤め，それから隣村八田村(現伊野町八田)へ移って行ったが，文政7年(1834年)に北川郷（安芸郡北川村）の大庄屋となった。

先代中岡要七は天保7年(1736年)6月に郷士北川助七郎に殺害され，跡目が絶えたが，北川郷中の申請によって，数代庄屋を勤めた旧家の訳をもって，藩庁から天保7年9月，要七の長男中岡小伝次に北川郷，新規大庄屋を仰附けられた。小伝次は頭脳明敏，一かどの人物で安芸郡庄屋の中でも重きをなしていたが，安政4年(1857年)に病気になったので，その子中岡慎太郎(1838年生れ)が北川郷の大庄屋見習いとなった。

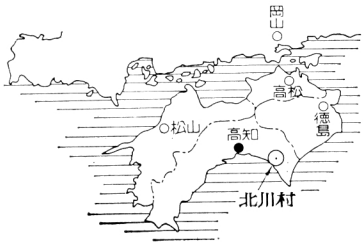

図-1　高知県の位置図

庄屋期間は安政4年から2カ年（20才前後）であったが，その業績は見るべきものがあった。

写真-1　庄屋時代の中岡慎太郎

慎太郎の庄屋時代の業績としては，次のようなものがある。北川村は高知市から約50 km東に位置し，現在は林業中心の村であるが，中央部には奈半利川が流下している。慎太郎は奈半利川の洪水対策の抜本策として，郷中の人々に金穀を貸付け，これにより山林を整理し，伐木の後へ必ず植林を行わせた。今でも，鳥ケ森，上杉，島，二又，小川等にその植林の跡が残っているという。また，田畑の開墾を奨励し，高知城下から作物の優良品種を取寄せ，これを無償配布して作物栽培の指導を行うと同時に，飢饉や災害に備えるため，貯蓄を勧め，共同倉庫を造らせて食物を貯蔵させた。

とくに，藩の補助を受け「ハモド」地区の耕地整理を断行したことは卓見であり，しかも若年ながらこれを為したゆえに，その功績はほめたたえられた。

III. 慎太郎の耕地整理の跡

北川村柏木（中岡慎太郎の生家のある部落）の西岸にあって，中世の長宗我部地検帖に「ハマウツの村」と記され，現在は「ハモド」と呼ばれている地区がある。この地区で奈半利川の洪水により農地災害が発生したが慎太郎はその復旧に当り，耕地整理を行っている。

奈半利川はその源を安芸郡馬路村魚梁瀬に発し，今日では堤高115 mの魚梁瀬ダムが完成しているが，魚梁瀬は魚梁瀬杉で知られるように全国でも多雨地帯に属し，平均年降水量は4,500 mmにも達し，当時は水との戦いに明け暮れ，毎年のように洪水に悩まされていたと考え

* 前高知県南国耕地事務所（むらた　まさき）

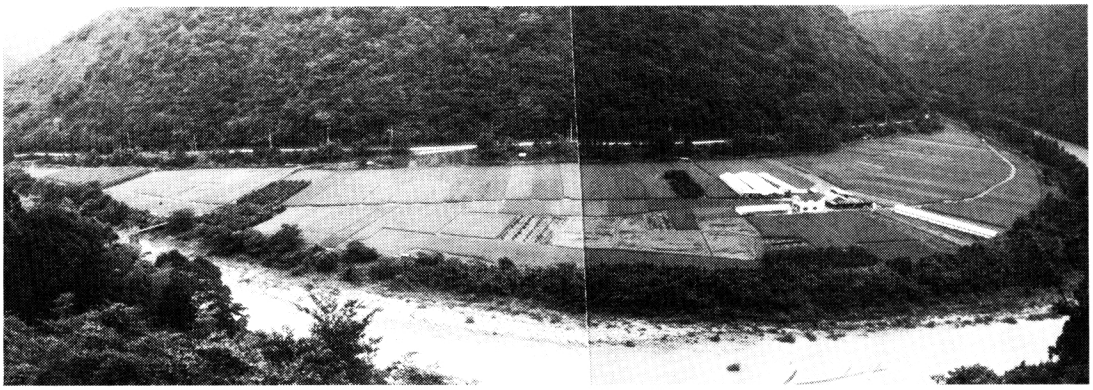

写真-2　柏木からハモド地区を望む

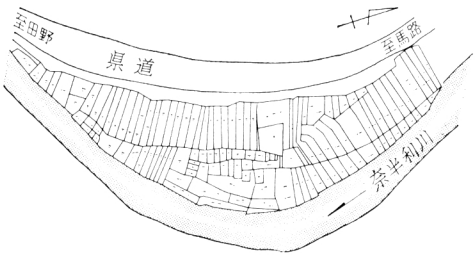

図-2　ハモド地区の耕地整理平面図

られる。

耕地整理を今から130年前（安政4年～6年）に若冠20才の村長が行ったのである。その概要は，1)耕地整理面積約5町3反，2)総筆数153筆，3）1筆の面積3畝～1反，内訳としては，水田が5町2反，畑が8畝，農道が3畝であり，筆形は一筆の面積に大小はあるが，現在でいう換地を考えた結果のようで，筆形は正方形と長方形とで構成されている。

今の圃場整備と比較してみると，幹線道路のみで，水路はなく，少しでも土地を減少させないように有効利用していることがよくわかる。現在の機械を導入する営農形態には向かないが，当時としては，すばらしいものであったろうと思われる。

VI.　時代は動く

時代は徳川幕藩体制の末期で，この時期に日本人初の国際人となった「ジョン万次郎」で有名な土佐清水市中浜の中浜万次郎が帰国して，土佐の画家の川田小竜等が世界情勢を聞き，これを青年たちに伝え，慎太郎も坂本竜馬らとともに，若き血を燃やすこととなり，その結果，明治維新となって，わが国が近代国家として誕生する。しかし，その原動力となった坂本竜馬，中岡慎太郎は，共に30才台前半の若さで慶応3年（1867年）11月15日に京都池田屋にて倒れることになる。

写真-3　庄屋時代の中岡慎太郎

V.　おわりに

土佐の生んだ幕末の志士，中岡慎太郎の生い立ちや農業土木の業績などを紹介したが，今までは，志士としての活躍の面のみが取上げられ，農業土木面での活動などは日の当たることがなかった。

こうした先人の活躍が基礎となって今日の農業土木があるわけで，とくに農業水利，圃場整備などは長い歴史の影響を再認識し，今日のわれわれも農業を取巻く厳しい諸情勢にしっかり根を張った考え方で対応してゆくことが重要なことと痛感する。

最後に，この草稿の作成に当り土佐史談会瀬戸鉄男さん，北川村役場の前田次長さんの協力に対し，誌上を借りて厚くお礼申し上げる。

参　考　文　献

1)　安岡大六著：北川風土記

〔1988. 9. 26. 受稿〕